

December 7, 2025

平和の神  
ルカ 2:10-14

2:10 御使いは彼らに言った。「恐れることはありません。見なさい。私は、この民全体に与えられる、大きな喜びを告げ知らせます。

2:11 今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。

2:12 あなたがたは、布にくるまって飼葉桶に寝ているみどりごを見つけます。それが、あなたがたのためのしるしです。」

2:13 すると突然、その御使いと一緒におびただしい数の天の軍勢が現れて、神を賛美した。

2:14 「いと高き所で、栄光が神にあるように。地の上で、平和がみこころにかなう人々にあるように。」

今は不安な時代です。この5年間を振り返っても、良いニュースはほとんどありませんでした。2021年、新型コロナウイルスは相変わらず人々の健康を脅かし、生活を制限しました。アメリカ軍のアフガニスタンからの不名誉な撤退により、タリバンが首都を制圧しました。2022年はロシアがウクライナに軍事侵攻し、まだ停戦に至っていません。世界中で物価が高騰しました。2023年、新型コロナウイルスの影響からようやく回復しましたが、世界の経済は回復せず、低迷したままでした。2024年、大統領選挙活動中のトランプ氏への銃撃事件が起きました。2025年、ロサンゼルスで山火事がありました。日本の大分県でも、香港でも大きな火災がありました。ワシントンDCではアメリカン航空の旅客機と軍のヘリコプターが衝突し、全員が亡くなりました。インドでも航空機事故がありました。ミャンマーでは大きな地震があり、3,700人が亡くなりました。

た。フィリピンのセブ島でも地震があり 70 人以上が亡くなりました。テキサスの洪水では 130 人もの人が亡くなっています。チャーリー・カークさんがアリゾナで、二人の州兵がワシントン DC でテロリストの標的になりました。

イエスがベツレヘムでお生まれになったとき、天使は羊飼いに「恐れるな」と語り、救い主の誕生を告げたあと、「神に栄光、地に平和」と歌いました。このような不安な時代ですが、神は、今も、私たちに「恐れるな」と語り、「平和」を告げておられます。その神からの平和、平安を受け取るにはどうしたらよいのでしょうか。

## 一、偽りの平安

それには、まず、「偽りの平安」を取り除くことが必要です。私たちは、数多くの不安な出来事に取り囲まれています。それでも、毎日の生活が成り立っていると、そうしたことを見聞きしても、「私だけは大丈夫」という安心感を持ちやすいものです。

イエスが話された「愚かな金持ち」の譬えには、一人の地主が登場します。この人は、自分の畑で豊作が続いたとき、心の中でこう言いました。「どうしよう。私の作物をしまっておく場所がない。……こうしよう。私の倉を壊して、もっと大きいのを建て、私の穀物や財産はすべてそこにしまっておこう。そして、自分のたましいにこう言おう。『わがたましいよ、これから先何年分もいっぱい物がためられた。さあ休め。食べて、飲んで、楽しめ。』」この人は、豊かな収穫が神の恵みであることを認めず、「私の作物」、「私の倉」、「私の穀物」と呼びました。自分の力で得た自分だけとものと考えたのです。さ

らには「私のたましい」とさえ言って、あたかも自分の力で生きているかのように錯覚したのです。自分の持ち物が自分の命を支えていると考え、偽りの平安の中に生きていました。そんな彼に、神はこう言われました。「愚か者、おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。おまえが用意した物は、いったいだれのものになるのか。」（ルカ 12:16-20）現代も、「私は健康で財産もある。もしもの時のために保険も買ってある。だから大丈夫」と思い違いをして、本当の平安が神にあることを忘れていく人が多くいることでしょうか。

預言者エレミヤの時代、人々は神に背き、神への信仰を形式的なものにしてしまいました。社会に不正がはびこり、国がバビロン帝国からの圧迫を受けているのに、指導者たちは、「エルサレムは神が選ばれた場所で、そこに神殿があるかぎり、神はエルサレムが滅びるのをお許しにならない」、「これは主の神殿だ」などと言って、神殿を、まるで「保険」のように扱い、人々に偽りの平安、勝手な安心感を広めていました。それに対して神は言われました。「彼らはわたしの民の傷をいいかげんに癒やし、平安がないのに、『平安だ、平安だ』と言っている。」（エレミヤ 6:14）

病気になると熱が出たり、痛みを感じたりします。熱や痛みはからだの異常を知らせるサインです。もし、からだが痛みを感じなかったら、病気がどんどん悪くなって、とんでもないことになってしまいます。痛みもまた、神が私たちに与えてくださった恵みの一つなのです。同じように、私たちが心に痛みを感じ、不安を持ち、悲しんだりするのも、神の恵みです。罪を犯してもそれに痛みを感じない、罪の結果を思って不安にならない、神の栄光を損なってもそれを悲しまないとしたら、私た

ちは、どんどん罪の深みに溺れてしまうでしょう。

"NO FEAR" というステッカーを車に貼って乱暴な運転をする人がいます。「恐い者知らず」というわけで、そのことを自慢しているのですが、「恐い者知らず」ほど「恐いもの」はありません。クリスチャンは “NO FEAR” というステッカーに対して “FEAR GOD” というステッカーを作って対抗していますが、私たちは、神への真実な恐れから来る痛みや苦しみを、神からのサインとして見逃さないようにしたいと思います。苦しむべき時に苦しみ、悲しむべきことに涙を流し、不安になることを恐れないで、そこから本当の平安を求めましょう。

## 二、神との平安

病気を隠し、それを感じなくさせることが病気を悪くし、死に至らせるように、罪も、それを隠したり、否定したりすることによって、私たちを、赦しや癒やし、また、きよめから遠ざけます。そして、罪の支払う報酬である「死」に至らせます。罪を認めることは心が痛むこと、赦しを願うことは謙虚にならなくてはできないことです。しかし、そのように罪を悲しみ、へりくだって赦しを乞う、悔い改めを通らなくては、本当の平安を持つことはできません。

イエスは、弟子たちに言われました。「わたしはあなたがたに平安を残します。わたしの平安を与えます。わたしは、世が与えるのと同じようには与えません。あなたがたは心を騒がせてはなりません。ひるんではなりません。」（ヨハネ 14:27）イエスがくださる平安は、「気休め」でも、「安心」でも、「手輕ないやし」でもありません。本物の平安は、私たちの罪

が赦され、神の前に恐れなく立つことができこそ、はじめて得られるものだからです。主イエスは、私たちに、本物の平安を与えるために、そのご生涯を涙と嘆きの祈りをもって過ごし、十字架の痛みと苦しみを最後の最後まで甘んじてお受けになりました。そのことをイザヤ 53:3-6 はこう言っています。

53:3 彼は蔑まれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で、病を知っていた。人が顔を背けるほど蔑まれ、私たちも彼を尊ばなかった。

53:4 まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みを担った。それなのに、私たちは思った。神に罰せられ、打たれ、苦しめられたのだと。

53:5 しかし、彼は私たちの背きのために刺され、私たちの咎のために砕かれたのだ。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、その打ち傷のゆえに、私たちは癒やされた。

53:6 私たちはみな、羊のようにさまよい、それぞれ自分勝手な道に向かって行った。しかし、主は私たちすべての者の咎を彼に負わせた。

イエスはご自分の苦しみによって私たちに平安をくださり、ご自分の受けた傷によつて私たちを癒やしてくださるのです。イエスがくださる平安は「世が与えるもの」とは全く違うもので、私たちのたましいの奥深くにとどまり、日々に深められていくものです。それは、どんなものによつても奪われることはありません。

### 三、世界の平和

では、神のくださる平和は、たましいの中だけに見出されるのでしょうか。いいえ、それだけでは終わりません。たましいから溢れ出し、流れ出し、多くの人を潤し、世界を再び命にあふれたものにするのです。

イザヤ 9:6 に、イエスのことがこう預言されています。「ひとりのみどりごが私たちのために生まれる。ひとりの男の子が私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は『不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君』と呼ばれる。」イエスはこの預言の通り「平和の君」、「王」としてお生まれになりました。イエスがお生まれになったとき、ユダヤはエドム人のヘロデ大王によって治められていました。ヘロデはローマの元老院に取り入ってユダヤ王の地位を手に入れ、ローマも、ヘロデ王家を通してユダヤを治めることによって、ローマ帝国内で一つだけ宗教の違うユダヤの人々をうまく取り扱おうとしたのです。

イエスはたしかに、ダビデの血筋を継ぐ、正統な「ユダヤの王」です。しかし、イエスはこの世の王ではありませんし、ユダヤ人だけの王でもありません。イエスは父なる神から神の国の王として立てられ、神の国は全世界に及ぶもののなのです。もし、イエスがこの世の王なら、十字架を避け、ローマ帝国にかわる大帝国を築きあげたことでしょう。

弟子たちの中には、イエスが天にお帰りになるときも、ユダヤの政治的な復興を願っていた者がいました。けれども、イエスが弟子たちに命じたのは、全世界に出て行って福音を伝えることでした。「平和の君」であるイエスは、この世の王のように軍隊で世界を征服するのではなく、神の言葉で、悪に征服され、罪に縛られ、死の恐怖におののいている人々を解放し、神の愛のご支配へと導かれるのです。

イエスを十字架に追いやったのはユダヤの宗教指導者で、パリサイ人やサドカイ人たちでした。しかし、彼らがよりどころとしていた神殿はエルサレムもろとも破壊されました。そし

て、エルサレムを滅ぼしたローマ帝国も、それから 400 年して滅びてしまいました。地上に永遠の国はありません。しかし、神の国は永遠の国です。地上に完全に正義が支配する国はありません。しかし、神の国は義の国です。地上にまったく平和な国はありません。しかし、神の国には平和が満ちています。なぜなら神は平和の神であり、御国の王イエスは平和の君だからです。

この神の国の広がり、世界に平和を与えてきました。JOYEUX NOEL（ジョウユー・ノエル）、フランス語で Merry Christmas という意味ですが、そのタイトルの映画があります。これは第一次大戦のとき、互いに戦っていたスコットランド、フランス兵士とドイツの兵士たちがクリスマス・イヴに停戦し、武器を捨て、クリスマスを祝った実際にあったことを映画にしたものです。人々の心に蒔かれた福音が人と人との間に兄弟愛を生み出し、平和を作りました。

世界は、今、国と国とが対立し、戦争が行われています。この世界に平和が打ち立てられるのは、「王の王、主の主」であるイエス・キリストがもう一度来られるときです。私たちはそのときを待ち望んでいます。けれども、待ち望むといっても、何もしないでぼんやり待っているわけではありません。ヤコブ 3:18 に「義の実を結ばせる種は、平和をつくる人々によって平和のうちに蒔かれるのです」とあるように、私たちは、平和の福音、神の言葉の種を蒔きながら、そのときを待ちます。「世界平和」などというと、あまりに大きなことで、私たちには何もできないように思ってしまいます。とても「平和をつくる者」にはなれないと感じます。しかし、御言葉には命があります。時が良くても悪くても、御言葉の種を蒔き続けるなら、か

ならずそれは芽を出し、枝を伸ばし、葉をしげらせ、平和の実を結びます。そのことを信じて、御言葉の種を蒔き続け、平和を祈り求め続けたいと思います。

### （祈り）

父なる神さま、あなたは、平和の神です。あなたは御子を世に送り、御子イエスは十字架によって、あなたと人との間に平和を作ってくださいました。このシーズンに、イエスがくださる平安を受け、他の人々との間にも平和をもって生きることができるよう、私たちを助けてください。私たちを平和の道具として用い、この世界に平和を与えてください。平和の君、イエス・キリストのお名前です。